

# 関西医科大学附属病院新入職薬剤師研修プログラム

第1版 2026年3月1日作成

## 【研修目的】

薬剤師研修プログラムは病院理念、病院基本方針、薬剤部目標を達成するための基盤を確実に築くため、体系的な新人研修プログラムを実施すること。高度医療の臨床・研究に携わる大学病院として求められる専門性と、患者さんに寄り添う姿勢の双方を育むこと。

## 病院理念

**慈仁（めぐみ）を心の鏡とした、安全であたたかい医療を提供します。**

### 基本方針

1. 患者の意思を尊重し、個々の患者に最適な医療を行います。
2. 感染対策に注力し、安全な医療に最善を尽くします。
3. 医療人の責任と自覚を持って、チーム医療を行います。
4. 地域の医療機関との連携を深め、地域社会に貢献します。
5. 先進的な医学研究にとりくみ、最新の医療を提供します。
6. 医育機関として人間性ゆたかな優れた医療人を育成します。

### 薬剤部目標

- ▶ 大学病院ならびに特定機能病院としての名に相応しい安全で効率的かつ質の高い薬物療法を提供しうる薬剤部の構築
- ▶ 医薬品を患者のQOL向上のためのツールとして役立てることができる薬剤師の育成

## 1.医療安全を最優先とした基礎能力の習得

薬剤師として最も重要な「安全で正確な薬物療法の提供」を実践するため、調剤・監査・投薬などの基本業務を丁寧に学びます。医療事故防止の視点を早期に身につけ、リスクを予測し回避する力を養う。

## 2.臨床現場で生きる実践力の育成

病棟業務、TDM、持参薬確認、処方提案など、臨床薬学に基づく実践的なスキルを段階的に習得させ、多様な症例を通じて、薬物療法の最適化に貢献できる判断力を養う。

## 3.大学病院としての専門性への適応

がん、感染症、救急、周術期など、専門領域の基礎知識を学び、高度医療に対応できる薬剤師としての視点を身につけ、最新のエビデンスに基づく薬物療法を理解し、臨床に活かす能力を身につける。

## 4.多職種連携とコミュニケーション能力の強化

医師・看護師・コメディカルと協働し、チーム医療の一員として役割を果たすためのコミュニケ

ーションスキルを磨き、患者さんやご家族との関係性も高め、信頼される薬剤師を目指す。

## 5.専門職としての倫理観と責任感の確立

薬剤師としての倫理、守秘義務、プロフェッショナリズムを理解し、大学病院の理念に沿った行動ができるよう育成する。

### 【基本方針】

大学病院ならびに特定機能病院としての名に相応しい安全で効率的かつ質の高い薬物療法を提供し、医薬品を患者のQOL向上のためのツールとして役立てることができる薬剤師の育成。

病院内での薬剤部の組織的な力量の維持・向上には、個々の薬剤師がそれぞれに与えられた役割を果たす能力を身につけ、更なる向上をはかり、それらを薬剤部の総合的な力として高めることが要となる。そのうえで薬剤部としての目標と個人の成長目標とを一致させる。

### 【実施体制】

#### (1) 研修を管理する委員会

教育委員会がこれを担う。教育委員会は医師、看護師、臨床検査技師、放射線技師、栄養士、医用工学技士、MSW、薬剤師より構成されている。研修プログラムの策定、進捗管理などの一連の業務を統括管理する。

研修管理者は薬剤部長とし実務を薬剤部副部長が担当する。

指導者は実務経験4年目以上の常勤薬剤師が指導にあたる。

#### (2) 教育研修プログラムの評価と改訂

教育研修プログラムの内容、実施状況等に関して定期的に自己評価し、教育研修プログラムの見直しが必要な場合は教育委員会で審議した上で改訂する。また、必要に応じて、一般社団法人日本私立医科大学協会薬剤部長会議において、教育研修プログラムの内容、実施状況等に関する外部評価を受ける。

### 【初期業務教育の手法】

附属病院勤務薬剤師としての独り立ちに必要な事柄の習得

- ▶ 知識
- ▶ 技能
- ▶ 薬剤業務に対する取り組み姿勢
- ▶ 期待されている役割の自覚

～OJT(On the Job Training)と OFF-JT(Off the Job Training)～

現場での薬剤業務の遂行を通して、先輩薬剤師が目標に沿って意識的に後輩薬剤師の育成・指導に取り組む活動をOJTと呼ぶ(チェック・リスト(別紙)により到達段階の確認を行う)

単に、成り行きで業務の要領やコツを身につけることではない

### On the Job Training

調剤、製剤、投薬窓口業務、注射薬調剤、注射薬無菌調製、医薬品管理、病棟業務、重症部門病棟業務(高度救急救命センター、外科系集中治療室)、外来化学療法室

## OFF the Job Training

各専門領域(がん、緩和、感染)の講義、ケースカンファレンス、その他勉強会・研修会などチーム医療緩和ケアチーム、感染制御チーム、栄養サポートチーム、褥瘡チーム、心臓リハビリチームに希望により参加可能。

### 【初期業務教育の目標】

- ▶ 4月：調剤は全て W チェック・一般薬の混合調製開始
- ▶ 6月：内服・注射薬単品単独調剤開始
- ▶ 7月：散剤・水剤・麻薬単独調剤開始
- ▶ 翌年3月：単品 W 監査開始
- ▶ 翌年5月：薬剤管理指導業務開始
- ▶ 翌年6月：抗がん剤調製業務開始
- ▶ 2年間で初期の業務教育を完了する
- ▶ 3年目以降は調剤業務担当者や病棟業務担当者といった固定配置の概念を排除し、すべての薬剤師が調剤業務や臨床薬剤業務などを担う業務体制に加わる。

### 【薬剤部員教育プログラム】

チェックリストについては以下の5部構成とする

- ① 調剤業務開始に向けて
- ② 混注業務に向けて
- ③ 薬剤管理指導業務・病棟薬剤業務に向けて（基礎編）
- ④ 薬剤管理指導業務・病棟薬剤業務に向けて（実践編）
- ⑤ 監査業務に向けて

### 【新人サポート体制】

- ① 新人（1年目・2年目）に対して、各サテライトの先輩薬剤師2名がサポートする
- ② 業務で分からないこと、業務以外のことなど疑問点を解消する

### 【調剤】

研修目標：調剤業務の遂行能力を身につける

- 処方監査と疑義照会の実践
  - 電子カルテや検査値との突合による処方内容の妥当性確認
  - 疑義が生じた際、自主的に医師に確認・問い合わせができる能力
- 計数・計量調剤スキル
  - 散剤、軟膏、水剤など各剤形での調剤技術習得
  - 麻薬・毒薬・向精神薬の適切な取り扱いや管理

#### I) はじめに

調剤とは、「医師、歯科医師らの処方（医師法第22条、歯科医師法第21条）に基づき特定の疾患に対する医薬品を、特定の使用方法に適合するように調製し、患者に交付する業務をいい、薬剤

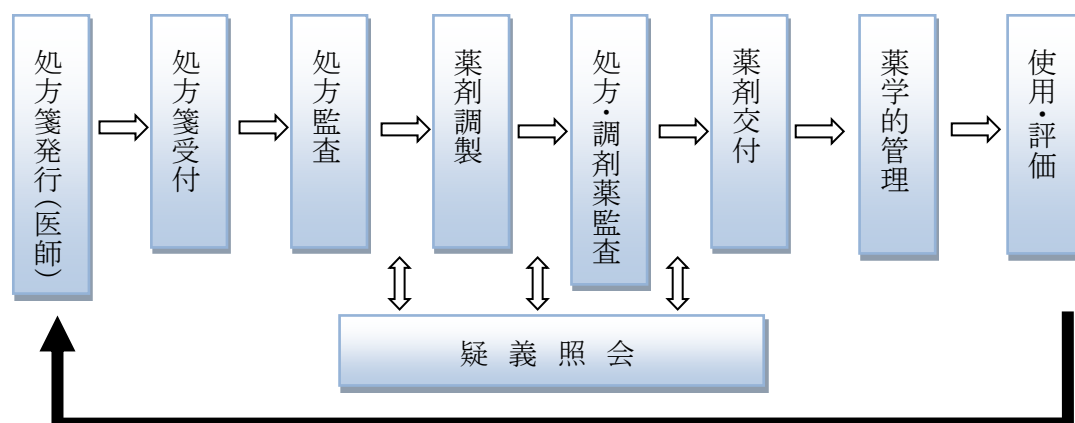
師の独占権が認められており（薬剤師法第 19 条）その職能により、患者に投与する医薬品の品質、有効性および安全性を確保すること」を目的としている。

病院内における調剤は、患者の薬学的管理業務の充実により、詳細な患者情報、医師の治療方針等を把握することが容易であり、医薬品使用の安全性および有効性をさらに高めることが可能となる。

調剤の実施には、それぞれの医薬品について薬剤学的、薬理学的、薬物動態学的に熟知した上で処方内容をチェックし、有効性および安全性を確保するとともに、調剤方法の決定ならびに服用時の指導など、一連の思考の上に本来の重点がある。したがって、調剤行為の根底には幅広く奥行き深い医薬品に関する学識と技術が必要となることを理解する必要がある。その使命として、薬剤師は単なる調剤技術者であってはならず、安全で合理的な医薬品使用を推進しうる科学者であらねばならない。

また、全ての調剤行為については原則複数薬剤師でのチェックを実施しなければならない

## II) 調剤の流れ



適正な調剤を行うには、調剤を行う場所の環境衛生に十分注意を払い、用いる器具の清潔、整理・整頓など快適な環境が必要となる。

調剤方法の統一化ならびに調剤過誤を防止するため、必要な場合は薬剤学的・薬理学的基盤を背景として、別途調剤業務マニュアルを定める。同マニュアルは同一処方について、薬剤師個々の判断により最終的な調剤形態が異なることで臨床現場に混乱を招くことを防止するため、また患者が正確に服用できるよう考慮した調剤上の取決めである。処方箋に特に指示のない場合は、この調剤業務マニュアルに従って調剤する。

適正な調剤とは、原則として、適正にオーダされた処方に基づいてオーダ通り適正に調剤することである。調剤を開始する際は、常に処方内容全体をチェックし記載内容が適正か点検する。処方内容および患者情報から医師の治療方針を推測し適正な処方か判断する。疑義照会の必要が生じた場合は、予め望ましい対処方法を念頭に置いて照会を行い、適宜医師にそれを提案する。

### 【注射剤業務】

研修目標：注射・無菌製剤業務を身につける

- 注射調剤能力

- 注射処方監査・確認・払い出しを適切に実践
- ガウン着脱など曝露対策を含む抗がん剤などの無菌調製技術
- 中心静脈栄養（TPN）や抗がん剤の無菌調製業務
  - 感染制御・調製技術・レジメン管理を含む一連の流れを習得

I) 注射剤、特に静脈内注射剤の使用過程には、一般に、注射処方オーダー取り揃え→混合調製→投与の段階が含まれており、経口剤の使用過程と何ら変わらない流れとなっている。取り揃え、混合調製の段階はそれぞれ経口剤の計数調剤、計量調剤に匹敵する行為であり、調剤と位置づけうる作業内容といえる。一方、静脈内注射剤は注射針を用いて直接体内に注入され、作用発現の早いことなどを特徴とするほか、作用の強い医薬品が多いことから、経口剤に比べ相対的に高い危険性を伴う場合が多く、安全かつ有効な注射療法の確立が必要となっている。この問題を合理的に解決することを目的とし、取り揃え、混合調製の段階は薬剤師が担うべき調剤行為と位置づけ、処方監査から調製薬監査までの一連の行為を習得することを目標とする。

## II) がん化学療法

研修目標：がん化学療法のレジメン管理や抗がん剤の調製、副作用や疼痛評価、支持療法薬の提案、投与計画への参画など基本的技能・知識を身に付ける。

### 抗腫瘍薬注射処方箋の定義

抗腫瘍薬注射の使用は原則としてあらかじめ登録されたレジメンに基づいて行われる。レジメンとは、癌種ごとに抗腫瘍薬、支持療法薬の薬品名、投与量、投与時刻、投与時間、投与速度、投与経路などが投与順に記載された治療計画書である。レジメンの登録は、院内薬物療法委員会において審査、承認されたものについてのみ行われ、登録レジメンの適用によってのみ抗腫瘍薬注射のオーダーが可能となる。当該適用日の1日分を1枚の処方箋として出力したものを抗腫瘍薬注射処方箋として取り扱う。

### 【薬剤管理指導・病棟業務】

研修目標：薬物治療管理および病棟業務において下記項目を身につける

- ◆ TDM（薬物血中濃度モニタリング）モニタリング結果に基づく投与設計・調整ができる能力
- ◆ 病棟業務・薬剤管理指導入院時・退院時の薬の確認・評価、服薬指導の実施ポリファーマシー対策、ハイリスク薬使用の適正管理
- ◆ 多職種連携とコミュニケーション医師・看護師などとの情報共有を通じ、薬物治療に対する提案力を習得服薬指導と患者対応患者・家族に対してわかりやすく丁寧な服薬指導ができる技能

I) 薬剤管理指導業務・病棟業務とは医師によって処方された医薬品を適正に使用するため、その性質、用法・用量、使用上・取り扱い上の注意などについて、専門的知識を駆使して個々の患者ごとに、医薬品使用に必要な薬学的管理を行うことを目的とする業務である。薬剤管理指導

業務・病棟薬剤業務は薬剤師として専門的知識を駆使して、個々の患者ごとに治療に必要な薬学的管理・指導を行うことによって、有効で安全な薬物療法を遂行し、治療効果を高めることによって、薬物療法の最大限の恩恵をもたらすことで患者の QOL を高めることを目標とする。

## II) チーム医療の実践

チーム医療の目的は、**多職種が専門性を持ち寄り、患者に最適な医療・ケアを提供すること**

### A) 患者中心の医療の実現

- **患者の状態・価値観を共有し、治療方針を多職種で統一する。**  
情報共有不足による治療のばらつきを防ぎ、意思決定を支援する。
- **薬物療法の安全性向上。**  
副作用の早期発見、相互作用の回避、投与設計の妥当性確認など。
- **退院支援の質向上。**  
服薬支援、地域連携、在宅医療へのスムーズな移行。

### B) 多職種連携の強化

- **病棟常駐・カンファレンス参加によるリアルタイム介入。**  
医師・看護師との相談が即時にでき、治療の質が向上。
- **ICT、AST、NST、緩和ケアなどのチーム医療への積極的参画。**  
感染対策、栄養管理、疼痛管理などで薬剤師の専門性を発揮。

## 【医薬品情報科業務】

研修目標：信頼性の高い医薬品情報の収集・評価・提供他職種や患者からの照会に対し、薬学的根拠のある情報を迅速に提供する能力を身につける

### I) 医薬品情報の収集・評価能力の確立

- 一次～三次資料を適切に使い分け、必要な情報を漏れなく収集できる。
- 論文のエビデンスレベルを理解し、バイアスや限界を評価できる。
- 新薬・安全性情報を迅速に把握し、院内に適切に展開できる。

### II) 問い合わせ対応（DI 業務）の実践力向上

- 医師・看護師・薬剤師からの質問に対し、**根拠に基づく回答書**を作成できる。
- 回答の構成（背景→検討→結論→参考文献）を理解し、論理的に説明できる。
- 配合変化、相互作用、用量調整、妊婦授乳、腎機能低下時などの典型的な質問に対応できる。

研修目標を達成することで得られる効果

- 薬剤管理指導の質が向上し、根拠に基づく説明が可能になる。

- 抗菌薬適正使用やがん化学療法の安全性向上に直結する。
- 多職種からの信頼性が高まり、チーム医療への参画が強化される。
- 医療安全の基盤が強化され、組織全体の薬物療法の質が向上する。